寄稿

災害からの復興における子どもの権利
～東日本大震災山田町ゾンタハウスの活動から

森田　明美
（東洋大学社会学部教授　東日本大震災子ども支援ネットワーク事務局長
NPOこども福祉研究所理事長）

はじめに

東日本大震災から10年は、子どもにとっては心身の成長、関係性、学業、仕事や、新しい家族の形成など激動の時期である。

私は、子どもの権利保障を重視した活動として子ども参加と意見表明、子どもの声を聴くということを大切にして、子どもと一緒に復興支援にかかわってきた。10年を迎える今取り組みを振り返りながら、災害からの復興に欠かせない子どもの権利の視点は何か考えてみたい。

1．被災地で中高生の軽食付き自習室を開いた背景

私は、震災直後の2011年３月末に、当時子どもの権利条約の具体化ということで活動していた国際NGOや国内機関と協力し、東日本大震災子ども支援ネットワークをたちあげ、子どもたちの声をおとなや世界中に届けるために直後にHPを開設した。当時、中高校生は地域から疎まれ、中学生が集まると警察に通報されて解散するようにと警察官が入るといったことが日本社会ではおきていた。そんな時期であったからこそ、被災地域の復興には地域の人たちと若者が一緒に復興する場が欠かせないと考えたのである。

中高生の軽食付き自習室を岩手県下閉伊郡山田町には［ゾンタハウス］、その後南三陸町や気仙沼市の避難所が大量に作られた登米市には［すこやか］を市民の寄付によって開設した。すこやかは４年間、ゾンタハウスは2020年の８月まで９年間、地域の人々と市民社会が力を合わせ、子どもたちと一緒に「希望」を共有した。まだ、子ども食堂もなかった時代である。被災地で育った子どもたちは、人の生死の分かれ目を子ども期に見て、それにそっと蓋をして必死に青年期を育ってきた。いつむっくり鎌首を持ち上げるかわからない震災時の恐怖と隣り合わせで生きているのである。家族や友人を亡くしたり、家も大切なものをすべて失い自分のことなど考えられない状況の子どもたちも多かった。

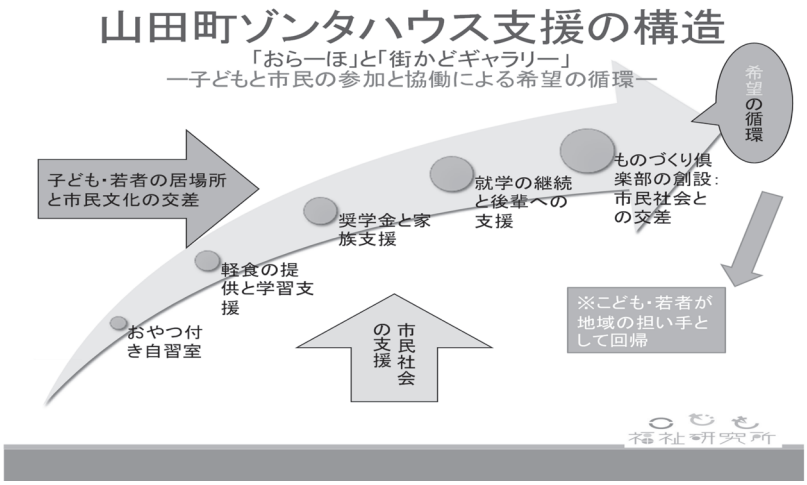
ゾンタハウスの活動は、一度冬のまき代を岩手県からいただいたが、ほかはすべて市民の寄付で運営し続けた。だから、運営を支える法人としての理念である子どもの権利の具体化という基準（そのために自治体で子どもの人権オンブズをしていた人たちには時々様子を見に行ってもらい、子どもの話に耳を傾けてもらった）があるだけで、現地の子どもたちがやりたいということ、何か活動をしたいという支援者の受け入れは子どもたちが良いというなら即決のスピード感で取り組んだ。理事長森田に時々判断が求められることはあったが、おとなと子どもが一体となって毎日を現地中心で過ごすことができた。全国、世界中の支援者が支援したいという気持ちになれるのも、実はこの格差社会ではとても重要な希望につながる活動だったと思う。

現地主義、子ども主体を最後まで貫き、

2020年夏まで私と一緒にゾンタハウスに関わり、一緒に育ってきた東洋大学社会学部森田明美ゼミ生も、現地を調査し、話こみながら、活動をどのように展開させるか、議論してきた。はじめる時はやめる時を探るときなのかもしれない。反省と次年度への引継ぎでは、毎年そんな話が学生からは出ていた。自分たちは卒業するが後輩はどうする？おらーほに集う若者と同世代になった学生は、わがことしてバトンをつないでゾンタハウスの居場所を一緒に運営してきた。

こうして、中高生の居場所であるゾンタハウスは、様々な人をそこでつないできた。そのつながり方は多様であるからこそ、価値がある。被災地で子ども・若者が、市民と一緒につくりだした居場所山田町ゾンタハウスの実践が教えてくれたことは何だろう。

山田町ゾンタハウスの活動の展開図



山田町ゾンタハウスの外観と各部屋の使い方

2. 運営への子どもの参加

9年余り毎月支援者の方々に山田町ゾンタハウスの様子を伝えるために書いた「おらーほ」だよりからいくつかご紹介しよう。

●おやつスタッフの悲鳴！＜2011年11月＞

テスト前、40人を超える人数の多さに、ついにトーストの待ち行列発生！！
しかも、寒くなったので、手のかかるホットココアに注文殺到　！
「おれの頼んだシュガートーストまだー」「あの、私ブルーベリージャムだったんですけど」「順番まもれ～」「はらへった～。待ちきれね～」「待って食うと、また格別。うめ～」コロッケサンドなど腹もちのするサンドイッチと、トーストの組み合わせにして、早めにジャムやピーナツ、シュガーなどのトーストを作って、ラッピングしておくことで何とか解決。サクサクしなくはなったけど、これはこれでしっとり風味。ココアは鍋で作って、おたまでコップへ。空腹と時間との勝負でした。

●「食べてる時間のほうが、勉強時間より長くなっちゃうぞ～」2012年5月

部活動も始まり､帰りの時間が6時過ぎ。2･3年などは、到着が7時になることも。ゆっくりしていると、勉強時間がほとんどない！！　ぐだぐだしている2年をおいて、さっさと勉強をはじめる3年生。少し早めに来て、緑ジャージパラダイスだった1年生は、場所を開けて帰る準備。わずか2時間の間に食べて、しゃべって、入れ替わって、そして勉強して。夜練習の部活動もあったりするので、早く帰らなければならないグループもあり、もう、てんやわんや。宿題するのが精いっぱいかな？

食事の材料などもすべて寄付で賄い、運営していた中で、1日40人を超える中高生が来室するとなると、その経費の一部負担もあっていいのではないかという議論が出てくる。子どもたちが話し合いで決めたのは「10円でも費用がかかると、親に小遣いをもらわないとおらーほに来れない人が出てくる。だれもが来たいときに一緒に来られる場でありたいから1人2枚までの制限を設けて、無料の継続を決定！」その結果台所には大きな張り紙で「1人トースト2枚まで」と書かれた。だがそれにも裏話がある。食べ盛りの中高校生が、部活動などを済ませた夕方お腹がすく。特に親が遠くに働きに出ていたり、ひとり親になったりしている家庭では夕食の準備ができない家庭もあった。そうした子どもには「来た

ばかりに食べて、帰宅時にもう一回食べればいい」と誰かが言い出した裏ルール。誰もが抵抗なく来られることと特別な状況にある人へのあたたかなおもいやりがいっぱいの「おらーほ」だった。

3. 中高生を孤立化させない工夫

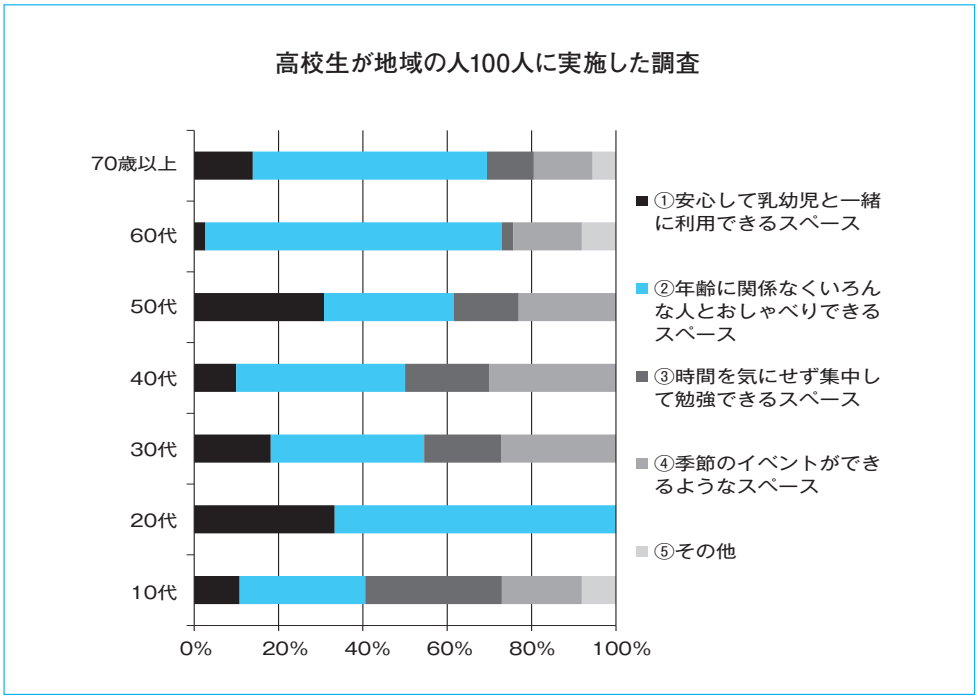
山田町ゾンタハウスでは、空き時間は、居場所を地域の大人たちの様々な活動の場に提供した。街かどギャラリーと呼ばれた場所では、展覧会だけでなく、手芸や工芸、音楽、絵画などの文化の交流を様々におこなった。高齢者が囲碁をしたり、子育て中の親子が集うこともあった。手仕事好きな女性が集まって保育所の布おもちゃを受託製作する「はなまるママ」もそのひとつで、その活動から派生して、町内や県外の保育所などに布おもちゃをプレゼントしたこともあった。単一の対象ではなく、誰もが交流することが、重要なのだということを感じたことはたびたびある。いろいろなところで出てくる思いやりは、お互いが生きることを支えあうのである。

4. おもいやりでつくられた「ZOOcafé（ズーカフェ）」

子どもたちは東日本大震災で初めて、家が津波にのまれ、焦土と化し、家族や親しい人が亡くなるのを間近に見た。時には、自分の被災体験はもっと辛い人がいるから「大したことではない」と判断して、悲しんではいけないと、自分の悲しみを封印して自分をふるいたたせてきた。震災発生当時、小学校5年生だった子どもが高校２年生になり、自分に心を寄せてくれる人たちに話を聞いてもらったり話をすることの中で体験をわがことにし、そのことを通じて、「全国から受けた支援に恩返しがしたい」「今度は自分たちが町を元気にする番」と、ふるさとを思い、自分たちでもできることがあるのではないかと考えるようになっていく。

その活動が契機になり、近所の仮設住宅に暮らすいろいろな世代の人100人アンケートをとって考えることにしたのである[1]。

調査の結果、世代ごとの分断が最も課題であることが明確になり、もっといろいろな人が集まり、交流できる場が必要だということを調査によって見つけ出す。発災から5年たった時でも、多様な人が集まり交流する場というのがキーワードになっている。その結果自分たちで改修のための図面を引き、自分たちの居場所を改装して多くの人が集える場を目指し、保健所に届けを出し、大学生たちとスタッフの力を借りながら、またしてもさらに多くの人が集う場を今度は自分たちで場所



をつくり出していった。

それが、2016年7月に山田町ゾンタハウスで始まった高校生によるZOOcaféの取り組みである。1か月1回と言っていたZOOcaféは小学生から高齢者まで毎回約40人を超える人が利用し、1人の滞在時間が長いのが特徴といわれる多世代の居場所となり、リピーターの方の利用と多様なメディアの広報の成果で広くさまざまな人が利用する場になり、高校生は概ね月に２回ペースで土曜日にcaféを開店した。東京から東洋大学の学生ボランティアも駆けつけないと追いつかないほど毎回大盛況。このZOOcaféは、高校生が卒業した後も、お盆や年末といったふるさとに人が集まるときには皆の交流の場として思い出スペシャル版などで、20回近く開店した後、2019年クリスマスを最後に閉じることになった。

高校生たちは、山田町ゾンタハウスで山田町のみんなと一緒に元気になりたいと活動を始めた。懐かしい故郷の山田町がことごとく消えていくのに対して、「支援される側」から「支援する側」「発信する側」へと変化していったのである。

5. 調査が明らかにしたこと

私たちには確信があった。それは、2014（平成26）年度と2015（平成27）年度に実施した被災地の学習支援の場で育った中学生や高校生を対象とした調査[2]において、子どもたちが、子どもたちの自己肯定感と将来に対する希望について比較を行ったところ、どちらも2015年度の調査の方が高い割合を示す結果が出た。子どもが市民が中心として行っている居場所と活動が子どもたちの生きる意欲を育てていることが分かったのである。またその意欲は、家庭や学校が日常的なケアの場として重要な役割を果たしているのに対して、市民が展開するこうした場は、子どもたちが自分の人生を探し出すために挑戦をする機会を提供することに貢献していることが明らかになったのである。

そこで、子どもたちがやってみたいと挑戦する機会を積極的に提供するように努めた。様々な市民や企業の方々にも協力をしていただいた。

その結果、日常的な地元の人を中心に淡々と行われた軽食付き自習室の活動と並行して、ゾンタハウスを利用しながら育った子どもたちは、震災復興に関する報告会などの場に積極的に参加し、自分たちの考えを発信してきた。

被災地は、「生きていてくれてありがとう」「生きていてよかった」とさえ言えない関係性も生じた地域である。自宅が無くなり、親族または家族が亡くなった場合でなければ、「被災していない」と答える人々など、多様な被害を受けた大人や子どもが多様な傷を背負って生きている。こうした中で、語る場を継続的に続けてきたことで、子どもたちは話をしていいのだということを実感し、話し出すことで、被災体験を少し客観化できて、聴いてくれた支援活動に来てくれた大学生たちや同じ体験をした被災者としてつながっていったのであろう。しっかり聞いてくれる大学生や大人の存在は大切だった。山田町と東京の夜行バスの往復で東京での報告会に参加した。中学生たちは、「よき大人」と「安心できる場所」との出会いによって、数年間でcaféを運営するまでの力をつけ、国会や大学など、おとなの前で堂々と意見を発表できるようになったのである。

震災から5年目の2016年、山田町ゾンタハウスから、東京へ1月2月3月と毎月のように出かけて自分の被災体験を語った高校生が、この3カ月で何を自分が得たかということの報告のなかで、「ようやく津波による祖母の死を悲しんでいいと思えたこと」と語っている。まさに、自分のことを考えるということを自分に許すという瞬間を勝ち取ったといえる。

「壊れた跡が残った街の方が好きだった。何もかもが消えていくんだ。これは復興じゃないと思う」ちっちゃい子たちは、ここからはじまるからここが故郷。じっちゃんやばっちゃんたちは、便利になれ

ば後はもうしょうがないと思ってる。

でも、うちらは「あの山田町」が故郷で、「この山田町」で生きていく。だから、なんだか悲しい。だから人間をつなげていきたい。」

「誰かのためにカフェをするとかそんなんじゃあなくて、自分たちはたくさんたくさんいろんなことしてもらって助けてもらって。自分たちの事思ってくれた人たちに、皆さんの気持ちが届いてこんなに元気にやってますよ、みんなに元気を分けられるくらい元気でやっています。ありがとうございますっていうのを伝えるのにカフェを選んだだけ。最初はただ面白いことができるかなあって思ったけど、来た人が喜んでくれて、ああこういうことがしたかったのかも？って思ったし、まだまだ受け取った気持ちの半分も返せてないと思う。」

ここに、震災の後、自分の青春を大切に生きてきた女子高生たちの誇りが育っている。［おらーほ便り2016年11月］

山田町ゾンタハウスの高校生たちの挑戦は、ほかの被災地域の若者や、山田町に暮らす多世代が力をあわせることによって、中高校生のキャリア形成という挑戦からもっともっと大きなソーシャルアクションを作り上げた。「子どもたちがこんなにがんばっているから」私たちもがんばらなくちゃと、毎回足を運んで応援して下さる高齢者のかたがたは「元気になれた。ありがとう」と精いっぱいの笑顔で高校生たちの笑顔に応じてくださる。高校生たちはこの笑顔がうれしくて、正月にはとり年にちなんだせんべいといった新しいメニューを考え、お客さんが誕生日だと聞けば、皆でhappy birthdayをうたって、誕生日のデザートをとっさに作り上げてしまう。そこでは、「あの子がこんなに大きくなって励ましてくれる」ということが何よりの応援となり、被災地で孤立するおとなをつないだ。災害は、家も地域も壊し、子どもを取り巻く環境は大きく変化する。既存の制度は不足し、合わないことが多い。地域の人が力を合わせ、残された人たちによって、残された場を使って必要な環境をつくり出すのである。

ゾンタハウスは、日本の児童福祉施策がないところから始めた挑戦であったが、そこで作り上げられた活動は、様々な寄付や応援といった市民社会の協力を得て、子どもが元気に育った。それは被災地で新しい価値を作り上げられない大人たちに対して、津波の傷をもふるさとらしさと思い、その故郷を誇りに思う若者たちの育ちである。

これまでの復興支援では、こうした中高校生などを対象にした学習支援や居場所支援、そしてそこで展開された子どもの参加などは、ほとんど取り組まれてこなかった。

年齢にふさわしい学びの機会と参加や意見表明の機会が保障されれば、子どもたちは地域の一員としてまちづくりなどにも積極的に関わった。今を生きる主体としての尊重と未来を託す期待を込めた中高校生支援が、震災からの復興において重要な視点であることを示唆している。

---

1 山田町の仮設住宅に住む人々や中学生など10代以上の人を対象にして、高校生たちが実施したアンケート。「若者からお年寄りまで幅広く、一番必要とされているのは赤色の「年齢に関係なくいろんな人とおしゃべりできるスペース」がほしいという結果。 山田町では、憩いの場というものがあまりない。またその数少ない憩いの場でも年齢層が偏っているということから、「年齢に関係なくいろんな人とおしゃべりできるスペース」の需要が多くなったのではないか？と 考えるにいたっている。この結果から、高校生カフェが山田町の方々が必要としている「年齢に関係なくいろんな人とおしゃべりできるスペース」に少しでも近づけるように頑張っていきたいなと語っている。第15回東日本大震災子ども支援ネットワーク国会議員会館での意見交換会の発言。

2 詳細なデータは東洋大学福祉社会開発研究センター（2015）「被災した子ども家庭を支援するためのシステム開発調査研究事業」平成26年度厚生労働省児童福祉問題調査研究事業課題１報告書.東洋大学福祉社会開発研究センター（2016）「東日本大震災による被災児童等に対する支援に関する研究」厚生労働省子ども・子育て支援推進調査研究事業課題12報告書に掲載されている。なお、報告書について、東洋大学福祉社会開発研究センターのHPに掲載されており、前者はhttp://www.toyo.ac.jp/uploaded/attachment/16539.pdfに、後者はhttp://www.toyo.ac.jp/uploaded/attachment/19941.pdf にアップされている。